



国際化の最前線から



めざすは外国人市民のエンパワメントと コミュニティづくり

(公財)箕面市国際交流協会 岩城 あすか

大阪府の北部に位置する箕面市の人口は、2023年7月末日現在で13万8,802人、うち外国籍市民は86か国3,029人にのぼる。市内に大阪大学の外国語学部が存在することから、世界各地からの留学生はもとより、25言語の語学を学ぶ若い世代の人口が多いという特徴がある。

現在、当協会では日本語教室や多言語媒体での情報提供、相談対応など、のべ50以上の事業を実施しているが、その中でも以下の2事業について紹介したい。

「共生」の最前線、comm cafe

当協会が実施する事業のうち、もっとも「共生」度合の濃い事業が、地域で暮らす外国人たちが主体的に参画し、等身大の相互交流を図ることを目的として運営されているコミュニティ・カフェ「comm cafe (コムカフェ)」である。

2013年5月11日のオープン以来、このカフェでは主婦(夫)や留学生など、“プロではない”外国人市民が日替わりでオーナーシェフになり、ランチやスナックを提供してきた。現在登録中のシェフは19か国30人ほどで、ランチは一律990円(税込)、手作り感あふれるアットホームな空気感を大切にしている。ぜひFacebookやInstagramをフォローいただきたい。



キッチンの様子。イラン料理の仕込みをしているところ

協働して作る月刊情報誌「めろん」

網目のようなネットワークを、という意味で名づけられた「めろん」の創刊は2006年4月。以来、毎月編集会議と原稿の読み合わせ、印刷、発送を職員とボランティアで協働して行ってきた。



月刊情報誌「めろん」

コンセプトは①『「ともに生きる」を实践するうえで、本当に大切なこと』を追求する、②「在住外国人目線」、「市民ボランティア目線」という切り口を大切にする、③すべての人を包摂する、の3点だが、言うは易し、行うは難し、である。

「無意識の暴力を生じさせていないか」「多文化共生の難しさと向き合いつつも、多様性が担保される社会の面白さを伝えられているか」など、読み合わせのときは誰がどんな原稿を書いても、多方面からさまざまな突っ込みが入る。

外国にルーツのある職員が多数在籍する当協会では、日々のやり取りを通して、言葉の壁やアイデンティティ、貧困や若者たちの就労にかかわる問題などについて、さまざまな角度から議論が交わされる。問題だけを見ずに、その背景にある社会構造そのものについて皆で考え、うまくいかない中でもやもやしつつも「Best of Better」を模索する日々が続いている。

プロフィール

岩城 あすか (いわき あすか)
大阪外国語大学でトルコ語を学んだ後、トルコ共和国イスタンブール大学(院)に留学、1999年におきた「トルコ北西部地震」の復興支援事業にもボランティアとして関わる。2019年度より(一財)自治体国際化協会の多文化共生アドバイザー。